

1. ノビネチドリ *Gymnadenia camtschatica* (Cham.) Miyabe et Kudô

昨年度の植物園だよりシリーズ②⑤では、本園の初代園長、宮部金吾博士ゆかりの植物について紹介しました。一方で、札幌農学校が東北帝国大学農科大学となった時代に、助手及び助教授として宮部博士とともに活躍した研究者がいました。「北千島^{ほろもしり}幌^{ほろ}廷^{しん}島植物誌」「北樺太植物調査書」を著し樺太・千島の植物研究に貢献した、工藤祐舜^{ゆうしゆん}博士その人です。そこで植物園だより 2025 年度のシリーズ②⑥では、園内で見られる植物のなかでも工藤博士ゆかりの植物について紹介していきます。

シリーズ初回は、春の林床で紅紫色の花を美しく咲かせる野生ラン、ノビネチドリをとりあげます。ノビネチドリは当初、フランス出身でドイツの植物学者 Chamisso により、主としてヨーロッパと南西アフリカに産する *Orchis* 属の新種として発表されました。その後、1915 年に発表された *Flora of Saghalin*『樺太植物誌』において、宮部と工藤によりテガタチドリ属 *Gymnadenia* に組み替えられています。表題の学名では、元になった学名を記載した Cham. ^{かっこ}が括弧でくくられ、その後に宮部と工藤の名前が続いています。

ノビネチドリは北海道・南千島・本州中部以北・四国に分布する多年草で、根元から縁が波打った楕円形の葉が数枚ついて 40cm ほどの高さになります。5 月、その先に紅紫色の小さな花が穂になって咲きます。根が横に伸びる性質があるので、ノビネチドリの名がついたと言われています。

ノビネチドリは本園では高山植物園で見ることができます。



2. エゾハナシノブ *Polemonium caeruleum* L.

subsp. *yezoense* (Miyabe et Kudô) H.Hara

今シーズンの植物園だよりは、札幌農学校が東北帝国大学農科大学となった時代に、助手及び助教授として活躍した、工藤祐舜^{ゆうしゆん}博士ゆかりの植物を紹介しています。シリーズ2回目は、初夏に青く美しい花を咲かせるエゾハナシノブを取り上げます。

エゾハナシノブは 1913 年に本園の初代園長宮部金吾と工藤によって、*Polemonium caeruleum* の亜種 subsp. *vulgare* の下に置かれる変種 var. *yezoense* として札幌博物学会会報にて発表されました。この仲間は分類が難しく、その後何度か学名の組み替えが行われ、現在は母種 *Polemonium caeruleum* の亜種 subsp. *yezoense* として扱われています。表題の学名では、最初に *yezoense* を記載した宮部と工藤が^{かつこ}括弧でくくられ、その後に組み替えを行った^{はらひろし}原寛の名があります。

エゾハナシノブは北海道・本州中部以北に分布する多年草で、根元から小さな楕円形の小葉が鳥の羽のようについた葉が広がります。この葉の形をシダ植物のシノブに見立て、花が咲くのでハナシノブの名がつけました。5～6 月、50cm ほどの高さに伸びた茎の先に青紫色の美しい花がかたまって咲きます。この仲間には幾つかの種内分類群がありますが、エゾハナシノブは花の裂片が筒状の部分の2倍ほどの長さになることで区別されています。



エゾハナシノブは本園では高山植物園の展示棚で見ることができます。



3. アポイゼキショウ *Tofieldia coccinea* Richards. var. *kondoi* (Miyabe et Kudô) H. Hara

今シーズンの植物園だよりは、札幌農学校が東北帝国大学農科大学となった時代に、助手及び助教授として活躍した、工藤祐舜^{ゆうしゆん}博士ゆかりの植物を紹介しています。シリーズ3回目は、高い山の岩場で白い小さな花をたくさん咲かせるアポイゼキショウを取り上げます。

アポイゼキショウは1914年に本園の初代園長宮部金吾と工藤によって、チシマゼキショウ属の新種として札幌博物学会会報にて発表されました。現在では、周極地方に広く分布するチシマゼキショウの変種として扱われています。表題の学名では、最初に本種を記載した宮部と工藤^{かつこ}が括弧でくくられ、その後に学名の組み替えを行った原寛^{はらひろし}の名があります。

アポイゼキショウは北海道南部、本州中北部、韓国の済州島に分布する多年草で、根元から細長い葉が広がります。5～6月、10cmほどの高さに伸びた茎の先に白い小さな花がかたまって咲きます。この仲間には幾つかの種内分類群がありますが、アポイゼキショウは花の柄がチシマゼキショウに比べて長く、葉の長さがほぼそろっていることで区別されています。

アポイゼキショウは本園では高山植物園で見ることができます。



4. エゾトウウチソウ *Sanguisorba japonensis* (Makino) Kudô

今シーズンの植物園だよりは、札幌農学校が東北帝国大学農科大学となった時代に、助手及び助教授として活躍した、工藤祐舜^{ゆうしゆん}博士ゆかりの植物を紹介しています。シリーズ4回目は、夏に紅紫色の小さな花が穂になって咲くエゾトウウチソウを取り上げます。

エゾトウウチソウははじめ牧野富太郎によって北アメリカに分布する *Sanguisorba canadensis* の変種として記載され、のちに工藤によって独立の種に変更されました。表題の学名では、最初に本種を記載した牧野^{かつこ}が括弧でくくられ、その後に学名の変更を行った工藤の名があります。

エゾトウウチソウは北海道の日高山脈にまれに見られる多年草で、分布が局在しているため、環境省の絶滅危惧種および北海道の希少種にそれぞれ指定されています。1m ほどの高さになり、縁にあらいギザギザのある楕円形の小葉が鳥の羽のようについた葉が、互い違いに茎につきます。8月、茎の先が枝分かれして、小さな花が長さ15cm ほどの穂になって咲きます。花びらはなく、雄しべの花糸と呼ばれる部分が紅紫色をしています。

エゾトウウチソウは本園では草本分科園で見ることができます。



5. ヒメアオキ *Aucuba japonica* Thunb. var. *borealis* Miyabe et Kudô

今シーズンの植物園だよりは、札幌農学校が東北帝国大学農科大学となった時代に、助手及び助教授として活躍した、工藤祐舜^{ゆうしゆん}博士ゆかりの植物を紹介しています。シリーズ5回目は、北海道では数少ない常緑広葉樹のヒメアオキを紹介します。

ヒメアオキは工藤と本園の初代園長宮部金吾によって、本州、四国、九州、南西諸島、及び朝鮮、台湾に分布するアオキの変種として記載されました。表題の学名では、変種を示す var. 以下の最後の部分に記載した宮部と工藤の名があります。

ヒメアオキは北海道と本州中部以北に分布する高さ1mほどの低木で、アオキ (*Aucuba japonica* Thunb.) が多雪地に適応して丈が低くなったものと考えられています。雄株と雌株があり、ともに春に茶色がかった紫色の小さな花が集まって咲きます。雌株では花の後に楕円形の実がなり、赤く熟します。冬でも青々としているのでアオキの名があり、アオキに比べ小さいのでヒメアオキと名付けられました。葉ははじめ光沢のある緑色ですが、古くなると茶色を帯び、乾燥すると黒くなります。

ヒメアオキは本園では樹木園の中ほど、園路から少し離れたところに生育しています。



6. アオトドマツ *Abies sachalinensis* (F. Schmidt) Mast.

var. *mayriana* Miyabe et Kudô

今シーズンの植物園だよりは、札幌農学校が東北帝国大学農科大学となった時代に、助手及び助教授として活躍した、工藤祐舜^{ゆうしゆん}博士ゆかりの植物を紹介しています。シリーズ5回目は、道央及び道南でよく見られるアオトドマツを紹介します。

北海道、南千島、サハリン、カムチャツカに分布するトドマツには、成木になると樹皮が割れて松ぼっくり（球果）の突起のような部分^{ほうりん}（苞鱗）が褐色で少し曲がるアカトドマツ、樹皮が成木でも割れず苞鱗が黄緑色で強く曲がるアオトドマツがあります。はじめにアカトドマツがトドマツ *Abies*

sachalinensis (F. Schmidt) Mast. として学名がつけられ、その後アオトドマツがトドマツの変種として工藤と本園の初代園長宮部金吾によって記載されました。表題の学名では、変種を示す var. 以下の最後の部分に記載した宮部と工藤の名があります。

アオトドマツは本園では正門から入って左側の針葉樹林の中で、アカトドマツは北方民族植物標本園で見ることができます。

